

# Mechthild のミンネにおける visio と gustus

## —中世宮廷文学におけるミンネとの比較研究—

須澤 通・浜 泰子\*

キーワード：神秘主義，宮廷文学，ミンネ，unio mystica

1. Mechthild von Magdeburg (1207?～1282?) の詩形式，表現様式と思想内容がドイツ中世宮廷文学，特にミンネザング (Minnesang) のそれと多くの点で共通していることはこれまでの研究によって指摘されている<sup>1)</sup>。彼女の書，『神性の流れる光』(Das fließende Licht der Gottheit)<sup>2)</sup>では，神は人の魂に対して「この台所では理解しえない宮廷ことばで挨拶し，宮廷で着る衣装を着せる」(So grusset er si mit der hovesprache, die man in dirre kuchen nut vernimet, und kleidet su mit den kleidern, die man ze dem palaste tragen sol)<sup>3)</sup>。ここで用いられる表現様式は宮廷文学に特徴的なものが多く，特に Allegorie, Paradox, Antithese, Oxymoron のような詩的手法では宮廷詩人の強い影響を見ることができる<sup>4)</sup>。

in dem schonsten liechte ist si blint an ir selber und in der groston blintheit  
siht si allerklarost. In der grosten klarheit ist si beide tot und lebende.  
Ie si langer tot ist, ie si vrolicher lebt. I. 22, 9 ff.

この上なく美しい輝きの中で彼女自身見えなくなってしまったが，全く見えない中で彼女にははっきりとものが見えた。このはっきりと見える状態において彼女は死してなお生きているのである。彼女の死が長ければ長いほど彼女の生は幸せになる。

Ir leben, ir tût sint unser brôt. sus lebet ir leben, sus lebet ir tût.  
sus lebent si noch und sint doch tût und ist ir tût der lebenden brôt.  
Und swer nu ger, daz man im sage ir leben, ir tût, ir vröude, ir clage,  
der biete herze und ören her Tristan 237 ff.<sup>5)</sup>

彼らの生，彼らの死は私たちの命の糧である。こうして彼らの生は生き，彼らの死は生きる。こうして彼らは今なお生き，実際には死して，彼らの死は生きる者の命の糧となる。今，彼らの生，彼らの死，彼らの喜び，彼らの苦しみが語られるのを聞きたいと思う者は，心と耳を貸されるがよい。

この他，Mystik (神秘主義) 独特の抽象語彙に多く見られる Mechthild の特徴的造語手段についても，その多くが宮廷詩人によって宮廷的理想概念創出のために創案されたものである<sup>6)</sup>。さらに，N. R. Wolf が Mechthild のことばに宮廷文学の Bildwelt (表象の世界) の影響を認めたように<sup>7)</sup>，何より彼女は思想，理念において宮廷文学と共通の精神基盤に立

ち、宮廷詩人とその精神的内容を共有していた。

Mechthild は彼女のウニオ ミスティカ (unio mystica) 「神秘的合一」を神と人間の魂の間の生きた相互関係の中で考える。すなわち神と人間の魂のウニオ (合一) は Mechthild ではエロス (恋愛・性愛) 的形象で見られる<sup>8)</sup>。しかしここでは、過度のエロスの描写は、宮廷文学における貴族的態度によって封じられる。次のような詩行の様式はミンネザング初期の詩人 Dietmar von Aist (1140? ~1171?) を思い出させる<sup>9)</sup>。

Schoener jungling, mich lustet din,  
 wa sol ich dich vinden? —  
 Ich hoere ein stimme, die lutet ein teil von minne,  
 Ich han si gefriet manigen tag,  
 das mir die stimme nie geschach.  
 Nu bin ich bewegt, ich muos ir engegen!  
 Su ist die jene, die kumber und minne miteinander treit. .I. 44, 9 ff.  
 美しき若者よ、わたしはあなたが恋しい。  
 あなたにはどこへ行けば会えますか? —  
 声が聞こえます、ミンネをささやいているように。  
 わたしは長い間ミンネを求めてきたのに、  
 ミンネの声は応えてくれませんでした。  
 今はもう心が落ち着きません。あのひとのもとへ行かなければ!  
 あのひととは苦しみとミンネを同時に持ち合わせているのです。

Seneder vriundinne bote, nu sage dem schoenen wîbe,  
 daz mir âne mâze tuot wê, daz ich sî sô lange mîde,  
 lieber hette ich ir minne  
 dann al der vogellîne singen.  
 nû muoz ich von ir gescheiden sîn,  
 trûric ist mir al daz herze mîn. —  
 ich muoz ofte engelten sîn.  
 vil dicke erkumet daz herze mîn.  
 ân sehendes leides hân ich vil,  
 daz ich ime selbe gerne klagen wil. Dietmar von Aist MF 32, 13 ff.<sup>10)</sup>  
 悩める恋人からの使者よ、あの美しい婦人に言ってほしい  
 あのひとにこれほど長く会わずにいてわたしは限りなく苦しいと。  
 小鳥たちの歌声よりも  
 あのひとの愛がほしいものだ。  
 わたしはあのひとから離れていなければならぬ。  
 心はひたすら愁いに沈んでいる。 —  
 わたしは絶えずあの方ゆえに悩まなければなりませぬ。

はげしく胸さわぐことも少なくありません。  
あの方に自分で訴えてみたいほどの  
大きな苦しみといつも向かい合っています。(高津春久訳)<sup>11)</sup>

Mechthild の神秘主義の独自性は、神とのミンネ（愛）がすべてを貫く根本動機となり、それが鮮やかな幻想や感覚に満たされた詩情と結びつきつつ、体験的に深められていることにある。従って彼女の神とのミンネは極めてパトス的な性格を持っているが<sup>12)</sup>、これは同時にミンネザングの Hohe Minne（高きミンネ）における「慎み深く制御された心」によって精神化される。以下に Mechthild の神とのウニオ、特にここにおける神への、そして神とのミンネについて、ドイツ中世宮廷文学との関係から、彼女の詩的表現形式と思想・内容の特徴を中心に考察する。

2. Mechthild の神秘思想を根底で支えている要素として、神とのウニオに関わる visio 「見ること」、gustus 「味わうこと」を中心とした「身体性」への志向があげられる<sup>13)</sup>。

Du *smeckest* als ein wintrubel, du *ruchest* als ein balsam I. 16, 2.  
(神よ) あなたはぶどうの味がし、香油の香りがする。

Den nim ich minstu sele in den arm min und *isse in*  
und *trinke in* und tut mit im, swas ich will. II. 22, 18 f.  
このひと（イエス）をわたしは、最も小さな魂ではあるが、わたしの腕に抱きしめ、  
このひとを食べ、飲み、そしてこのひととわたしの望むことをするつもりです。

So *siht* si iren got vroelichen *ane*. I. 4, 2 f.  
すると彼女（魂）は喜びにあふれて彼女の神を見つめます。

Ich arme unwirdige, ich versache min selbes und spricht,  
das ich *gesehen* han und *gehoeret* in gotte. VII. 13, 2 f.  
わたしは哀れで取るに足らない女であるが、自分のことはさておき  
わたしが神のうちに、聞いたことをお話ししましょう。

このうち visio は、ドイツ中世神秘主義において神を真に認識するための極めて重要な手段と位置付けられている。

Mechthild では、「魂は三ペルソナに一つの全神を見て、分けられない一つの神に三ペルソナを認識する」(*sihet* su einen ganzen got in drin personen und bekennet die drie personen in einem gotte ungeteilet I. 2, 8 f.)。

また「哀れな魂ではあるが宮廷に上がる時は聡明にして礼儀正しくなる。魂は喜びにあふれて神を見つめる。その時、なんと優しく迎え入れられることか」(Swenne die arme sele kumet ze hove, so ist si wise und wol erzogen. So *siht* si iren got vroelichen *ane*. Eya, wie

lieplich wird si da enpfangen! I. 4, 2 f.)。

さらに肉体から離れた Mechthild の魂は神を感覚的に見るばかりでなく、自ら両腕でかき抱く。「わたしの肉体は苦しみ続けているが、わたしの魂は無常の喜びの中にある。なぜなら魂は彼女の最愛のひと（神）を見、両の腕でしっかりと抱きしめているからだ」(Min licham ist an langer qwale, min sele ist an hoher wunne, wan si hat *beschovwet* unde mit armen umbevangen *iren lieben* alzemale. I. 5, 2 f.)。

神秘体験の中心に神を見ることを置く Mechthild にとって、目は特に重要な認識器官である<sup>14)</sup>。Mechthild は、visio とそのための器官である目について次のように述べる。

Man mag gotliche gabe mit menschlichen sinnen nit begrifen.  
Darumbe besundent sich die lute, die nit habent den offenen  
geist der unsehelichen warheit. Das man *mit vleischlichen*  
*ovgen* mag *gesehen*, mit vleischlichen oren mag gehoeren,  
mit vleischlichem munde mag gesprechen, das ist also ungelich  
der offenen warheit der minnenden sele als ein wachs licht  
der claren sunnen. VI. 36, 3 ff.

神の賜物は人間の肉の感覚では理解できない。それゆえ目で捉えることのできない真理に広く霊を開かない人々は過ちを犯すことになる。肉の目で見、肉の耳で聞き、肉の口で話すことができるものと、(神に)愛をささげる魂に提示される真理の違いは、一本のろうそくの灯に対する太陽の輝き同様比べようもなく大きい。

Ich enkan noch mag nit schriben, ich *sehe* es *mit den ovgen*  
*miner sele* und hoere es mit den oren mines ewigen geistes  
und bevinde in allen liden mines lichamen die kraft des heiligen  
geistes. IV. 13, 3 ff.

わたしは魂の目で見、永遠の霊の耳で聞き、そして体の全身に聖霊の力を感じる  
ことがなければ、書き記すことはできないし、その能力もない。

wenne si unsern herren mit *vleischlichen ovgen* nit *sach*,  
so was si ungetroestet und ir herze truog  
die wile grossen jamer und ungemach. V. 23, 183 ff.

彼女は肉の目でわたしたちの主を見ることができなかった時、  
絶望を覚え、心はこの間ずっと大きな悲しみを抱き  
不安な気持ちに襲われていた。

Mechthild は肉体の目を含む肉体の感覚の能力についてその限界を認め、「魂の目」、「霊の耳」の優位性を説いている。この「魂の目」に対する基本的態度は Meister Eckhart (1260?～1328?)に通ずるところがある。Eckhart においては、見る働きは「肉体の目」

から「魂の目」へと深められていく。ここでは「視覚は私の一部であるとともに、その働きにおいて私はむしろ視覚の一部である」という目の両義的性格は、肉体の目の働きからそのまま深められたかたちで魂の目の働きに高められる<sup>15)</sup>。Eckhart における肉体の目と魂の目の差異は、肉体の目が外から内へと受動的な働きをその本性とするのに対して、魂の目は内から外へと像を発出する、つまり表象能力を持っているという点にある<sup>16)</sup>。神は Eckhart にとって見る魂の目のうちに働いている力として、一方では見られる世界のうちに働いている力として魂と世界に二重の関係を持っている<sup>17)</sup>。Eckhart はさらに魂の目を内的な目と外的な目の二つに区別する。

Diu sêle hât *zwei ougen*, einz inwendic und einz ûzwendic.

*Daz inner ouge* der sêle ist, daz in daz wesen sihet

und sîn wesen von gote âne allez mittel nimet: daz ist sîn eigen werk.

*Daz ûzer ouge* der sêle ist, daz dâ gekêret ist gegen allen crêatûren

und die merket nâch bildelîcher wîse und nâch kreftlîcher wîse.

Eckhart, Predigt 10, Largier I. 122, 22 ff.<sup>18)</sup>

魂は二つの目を持っている、内的な目と外的な目である。

魂の内的な目は、存在の中を見通し、

その存在を神から仲介なしに直接受け取る目である。これがこの目特有の働きである。

魂の外的な目は、すべての被造物に向けられ、それらを目に見えるまま、

力を働かせて知覚する目である。

Eckhart を中心とする思弁的神秘主義者にとって、神に関わる究極の真理を認識するのは魂の目、その内的な目だけであり、肉体の目は宗教的霊性から一切排除される<sup>19)</sup>。

Mechthild も Eckhart に先立って、繰り返し「霊の高貴性」を説き、肉体の目、肉体の耳に対する「魂の目」「霊の耳」の優位性について語っているが、宗教的ミンネ文学、宗教的ミンネザングとよばれる彼女の書では、魂と神とのミンネは極めてパトス的で、魂と神は恋人同士のように愛情をこめ、優しい眼差しで見詰め合う。すでに見たように、魂は「喜びにあふれて神を見つめ (ane sehen)」(I. 4, 2 f.)、「最愛のひと (神) を見て (beschowen)」(I. 5, 2 f.) 両腕で抱きしめる。神も「愛し合う者同士 (die lieben) が真心から見詰め合う (schowen)」時、神の口でくちづけをする (II. 23, 28 f.)。神はまた魂を腕で抱き、父なる手を魂の胸に置いて「魂の顔を見つめる (an sehen)」(III. 1, 32 f.)。ここで神と交わす熱い眼差しは霊的幻視の中での行為ではあるが、抽象的ではなく、感覚的快感と結びついている<sup>20)</sup>。

Mechthild では五感の中心に「味覚」が置かれている。すなわち彼女の身体性のうち、最も重要な行為は gustus (味わうこと) であり、彼女の神秘思想の中心テーマは「神を味わうこと、享受すること」(gebruchung) である<sup>21)</sup>。Mechthild の gustus は, essen, smekken, spisen, nutzen, gebruchen, bruchen, verzern, trinken, sugen など多様な語彙によって描写される。

Eya untruwe, der die sele so edel het gemacht,  
 das si nut denne *got essen* mag,  
 der lat noch iren lichamen nit verwuschen. II. 23, 21 ff.

ああ何と不実な者よ、神以外の何ものも食べることができないよう  
 魂を気高く作られたお方（神）は、肉体も滅ばされることはしないのに。

Mir *smekket* nit wan alleine *got*, ich bin wunderliche tot. IV. 12, 22 f.  
 わたしが味わうのは神だけです。わたしは神秘的に死んでいます。

Hie von wirt sele und lip in himmelriche also ahtber und lobsan,  
 ....., und das si wunneklicher *gebruchent*  
 und tieffer *sugent in die heligen drivaltekeit* denne die andern. V. 25, 10 ff.  
 こうして魂と肉体は天国で尊ばれ称賛され、  
 ..., そのため他の誰よりも聖三位一体をおいしく味わい、  
 より深く飲みこむことができます。

und so beginnet si denne vroeliche ze *smekende* an irme vleisch *sine liebi*.  
 VI. 1, 147 ff.  
 そうすると彼女（魂）は自分の肉体に神の愛を嬉々として味わうのだ。

「神を飲み、食べる」の表現は新約聖書の記述にもとづく。

Jesus sprach zu ihnen: .... Wer *mein Fleisch isset*  
 und *trinket mein Blut*, der hat das ewige Leben,  
 und ich werde ihn an Jüngsten Tage auferwecken.  
 Denn *mein Fleisch ist die rechte Speise*,  
 und *mein Blut ist der rechte Trank*.  
 Wer *mein Fleisch isset* und *trinket mein Blut*,  
 der bleibt in mir und ich in ihm. Johannes 6, 53 ff.<sup>22)</sup>

イエスは彼らに言われた：...わたしの肉を食べて、  
 私の肉を飲む者には、永遠の命があり、  
 わたしはその者を終わりの日によみがえらせるであろう。  
 わたしの肉はまことの食べ物、  
 わたしの血はまことの飲み物。  
 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにあり、  
 わたしもまたその者におる。

Eckhart でも神に関わる「味覚」、すなわち *gustus* は、*essen*, *smecken*, *spisen*, *niesen*, *gebrüchen* などの多様な語彙によって表現される。

Ein kraft ist in der sêle, daz ist vernünfticheit.

Von êrste, sô diu *gotes* gewar wirt und *gesmecket*,

sô hât si vûnf eigenscheftē an ir. Eckhart, Predigt 69, Largier II. 46, 31 ff.<sup>23)</sup>

魂の中には一つの力があるが、それは知性である。

それが神を認めて味わう瞬間から

五つの属性をもつこととなる。

特に、聖アウグスティヌス (Sankt Augustinus) に示された神の御言葉は聖書の記述にもとづいている。

Dô hôrte er eine stimme bî im von oben :

„ich bin ein *spîse* grôzer liute,

wahs und wirt grôz und iz *mich*.

Dû ensolt aber niht waemen,

daz ich im dich gewandelt werde :

dû solt in mich gewandelt werden.“ Eckhart, Predigt 20 A, Langier I. 226, 16 ff.

そこで彼は自分の近くの上方から声を聞いた。

「わたしは大いなる人々の食べ物である。

成長しなさい、大きくなりなさい、わたしを食べなさい。

しかしわたしがそなたに変えられると思ってはいけません。

そなたがわたしに変えられるのです。」

Mechthild および Eckhart における gustus は霊的行為ではあるが、これとは対蹠的な肉体的、感覚的形象で見られ、特に Mechthild の gustus は、神とのウニオの手段として神のミンネを官能的に味わう身体的行為として具象的に描写されている。

3. Mechthild の思想内容はミンネザング (Minnesang) と多くの共通点を持っている。彼女と神のミンネは、ミンネザングにおける男女間の官能的なミンネを彷彿とさせる極めてパトスの形象の中、「高きミンネ」(Hohe Minne) の極めてエートスの性格を併せ持つ。上記の用例では、感覚的、官能的な身体的行為として具体的に描写された、神に関わる visio と gustus も、神的、霊的内容の強調によって、以下のように極めて抽象的に表現される。

Dis ist ein gruos, der hat manige adern,

der dringet usser dem vliessenden gotte in die armen,

durren sele ze allen ziten mit nuwer bekantnisse und

an nuwer *beschowunge* und an sunderlicher *gebruchunge*

der nuwer gegenwurtekeit. ....

Disen gruoz mag noch muos niemen enpfan,

er si denne uberkomen und ze nihte worden.

In disem gruosse wil ich lebendig sterben. I. 2, 35 ff.

これは（神が人間に贈られる）御心です。これは数多くの水脈を通り、  
 流れる神から衰れな、干し涸びた魂に耐えず流れ込み、  
 新たな認識、新たな観照を可能とし、  
 新たな臨在の特別な享受を可能とするのです。  
 この御心は自身を超越し、無にならなければ誰も受け取ることはできないとともに、  
 実際受け取ることはできないでしょう。  
 この御心の中でわたしは生きながらに死にたい。

Eya vro bryt, went ir mir noch ein wortzeichen sagen  
 der unsprechlicher heimlichkeit, die zwuschent gotte und uch lit?  
 — Vrovwe bekanntnisse, das tuon ich nit.  
 Die brute muessent alles nit sagen, was in beschiht.  
 Du helig *beschouwunge* und du vilwerde *gebruchunge*  
 sont ir han von mir, die userwelte bevindunge von gotte sol  
 uch und allen creatures iemer me verborgen sin sunder alleine mir. II. 19, 31 ff.

花嫁様、神とあなたの間の口に出して言えない秘密を  
 一言でもわたしに話していただけませんか？  
 — 認識婦人、それはできません。  
 花嫁たちは自分に起ることについては何ごとにも話すことはできません。  
 聖なる観照、崇高な享受についてはわたしからあなたにお聞かせしましょう。  
 しかし神に選ばれて神御自身を体験されることは、わたし一人のほかは、  
 あなたにも、すべての被造物にも永遠に秘密にしておかなければならないのです。

ここでは visio と gustus は神の御心の圧倒的な力によって、魂が身体から離脱し、自身を超越して無の境地に達した時に新たに得られる。さらにこの visio と gustus は神に選ばれた者のみに許された密かなるもので、他には秘密にされねばならない。

Man mag gotliche gaba mit menschlichen sinnen nit begrifen.  
 Darumbe besudent sich die lute,  
 die nit habent den offenen geist der unsehlichen warheit.  
 Das man mit *fleischlichen oogen* mag *gesehen*,  
 mit *fleischlichen oren* mag *gehoeren*,  
 mit *fleischlichen munde* mag *gesprechen*,  
 das ist also ungelich der offenen warheit der minnenden sele  
 als ein wabs licht der claren sunnen.  
 Das Johannes Baptista der armen dirnen messe sang,  
 das was nit *fleischlich*, es was also *geistlich*,  
 das die sele alleine *beschowete*, bekante und *gebruchte*. VI. 36, 3 ff.



神の賜物は人間の感覚では捉えることができない。  
 それゆえ目で捉えることのできない真理に広く霊を開かない人々は  
 過ちを犯すことになる。  
 肉の目で見、肉の耳で聞き、肉の口で語ることができるものと、  
 神にミンネを捧げる魂に啓示される真理の違いは、  
 一本のろうそくの灯に対する太陽の輝きと同様、  
 比較しようもなく大きい。  
 洗礼者ヨハネが哀れな乙女にミサを行ったのは  
 肉体によるものでなく霊によるものであったので、  
 魂だけが観照し、認識し、享受することができた。

Mechthild はここにおける神的、霊的な visio と gustus に関して, *beschowen* と *gebruchen* およびその名詞形 *beschowunge* と *gebruchunge* を使用し、他の語彙と区別する。これらの visio (*beschowen*, *beschowunge*) と gustus (*gebruchen*, *gebruchunge*) は、多くの場合, *bekennen* (認識する) もしくはその名詞形 *bekantnisse* を伴い、さらにこれらの前提として *minne* (ミンネ) が置かれる。

*Minne ane bekantnisse dunket die wisen sele ein vinsternisse,  
 bekantnisse ane gebruchunge dunket si ein hellepin,  
 gebruchunge ane mort kan si nit verklage.* I. 21, 2 f.

賢い魂には、認識のないミンネは闇に思われ、  
 享受のない認識は地獄の責苦のように思われ、  
 さらに死のない享受は、魂にはいくら嘆いても嘆き尽きないように思われる。

ここでは *minne*, *bekantnisse*, *gebruchunge* の関連性については、*minne* — *bekantnisse* — *gebruchunge* の順番で示される。

*Ich mag nit tanzen, herre, du enleitest mich.  
 Wilt du, das ich sere springe, so muost du selber vor ansingen;  
 so springe ich in die minne, von der minne in die bekantnisse,  
 von der bekantnisse in die gebruchunge,  
 von der gebruchunge uber alle moenschliche sinne.* I. 44, 32 ff.

主よ、わたしはあなたがリードして下さらなければ踊ることができません。  
 わたしを高く飛ばせたいとお望みなら、あなたご自身が先ず歌い出してください。  
 そうすればわたしはミンネに飛び、ミンネから認識へ飛び、  
 認識から享受へと飛び、  
 享受からすべての人間が持つ感覚を越えて飛んでいきます。

Mechthild の *gebruchunge* は、魂と神のウニオ (合一 = *einigung*) に至る最も重要な最

終過程であり、認識が求めてやまないミンネの究極目標でもある。ラテン語では *fruitio* (享受) で、K. Ruh は「愛の至福なる味わい」と解釈し、M. Heimbach は *gustus* (味わい) としている<sup>24)</sup>。この「愛の至福なる味わい」はしかし、自身を超越し無になること、すなわち「死する」ところにある。「死のない愛の享受は、魂にはいくら嘆いても嘆き尽きないように思われる」(I. 21, 3)。「この神の御心の中でわたしは生きながらに死にたい」(I. 2, 41 f.)。この死は肉体と感覚を浄化し、現世における至高の愛を絶対化、永遠化させる「愛の死」(*Liebestod*)<sup>25)</sup>であり、中世宮廷文学の『トリスタン』(*Tristan*)<sup>26)</sup>およびミンネザングの「愛の死」の理念と共通する。

この *gebruchunge* との関係で重要なものとして、*bekantnisse* とともに *unterscheide* があげられる<sup>27)</sup>。

Du grosse zunge der gotheit hat mir zuo gesprochen manig creftig wort;  
 du han ich enpfangen mit wenigen oren miner snoedekeit;  
 und das allergroeste lieht hat sich uf getan gegen den ovgen miner sele,  
 da inne ... bekante ... *das sundertruten mit underscheide*, ...  
*die grossen zuht in der bekantnisse*,  
*die gebruchunge mit der abebrechung nach der maht der sinnen*,  
 die ungemengete froede in der einunge der geselleschaft  
 und das lebende lip der ewekeit, als es nu ist und iemer wesen sol. II. 3, 4 ff.

神性の大きい御口はわたしに力強く語られた。  
 それをわたしは哀れな弱々しい耳で聞いた。  
 するとこの上なく眩しい光がわたしの魂の目に輝き、  
 その中にわたしは .... 弁別された比類なき愛、....  
 認識による大きい自制心、  
 感覚の力に対する節度を伴った（ミンネの）享受、  
 愛し合って結ばれること（合一）の純粋な喜び、  
 そして今も存在し、さらにこの先も存在し続ける永遠の生ける生命を認識した。

「弁別された比類なき愛」(*das sundertruten mit underscheide*) に関して Mechthild は、「拘束されない愛」(*du ungebunden minne*) と「拘束された愛」(*die gebunden minne*) を対比して次のように述べる。

*Du ungebunden minne* wonet in den sinnen,  
 wan si ist noch gemenget mit irdischen dingen. II. 24, 68 f.  
 拘束されない愛は感覚の中に住んでいる。  
 なぜならこの愛はまだこの世のものと混じりあっているからだ。

これに対して

Die gebunden minne wonet in der sele  
 und stiget uber menschliche sinne  
 und gestattet dem lichamen enkeines sines willen ;  
 si ist gezogen und vil stille ; si lat ir flugel nider  
 und hoeret nach der unsprechlichen stimme  
 und siht in das unbegriffenlich lieht  
 und wirbet mit grosser begirde nach irs herren willen. II. 24, 76 ff.

拘束された愛は魂の中に住み、  
 人間的な感覚を超越し、  
 身体の思いのままにはならない。  
 この愛には節度があり、大変穏やかである。この愛は自分の翼を下ろし、  
 言葉にされない声に耳を傾け、  
 目で捉えられない光に目を凝らし、  
 主の御意志を理解しようと一生懸命努めるのだ。

discretio (弁別) による「拘束された愛」、bekantrnisse (認識) による「大いなる自制心」、節度 (abebrechunge) を伴ったミンネの享受。これらは神への至高の愛において重なり合う。このような Mechthild のミンネの理念は、中世ドイツのミンネゼンガー (Minnesänger) Walther von der Vogelweide における minne と通ずるところがある。

Walther は肉体的、官能的な「低きミンネ」(nideriu minne) と精神的、道徳的な「高きミンネ」(hôhiu minne) の間で揺れ動く。こうした中、彼は「節度の女神」(frouwe Mâze) に助けを請う。弁別と認識による節度こそが「愛の至福なる享受」に繋がると信じるからだ。今、彼は高い名誉を求めて飛翔すべく高きミンネに向かおうと思うが、なぜか節度は現れない。彼の心を捉えて離さないのは、hohiu minne と nideriu minne の Synthese としての「心からの愛」(herzeliebe) である。

Aller werdekeit ein füegerinne,  
 daz sît ir zewâre, frouwe Mâze ;  
 er saelic man, der iuwer lêre hât!  
 ... dur daz sô suoche ich, frouwe, iuwern rât.  
 ... Nideriu minne heizet diu sô swachet  
 daz der lîp nâch kranker liebe ringet ;  
 ... Hôhiu minne reizet unde machet  
 daz der muot nâch hôher werde ûf swinget ;  
 diu winket mir nû, daz ich mit ir gê.  
 Mich wundert wes diu mâze beitet.  
 kumet diu herzeliebe, ich bin iedoch verleitet. Walther, L. 46, 32 ff.<sup>28)</sup>  
 気品のあるあらゆるものをお創りになられるお方、  
 節度の女神よ、それはまさにあなたです。

あなたの教えをうける男は幸せです。  
 女神様、それゆえわたしはあなたのお助けを求めるのです。  
 低きミンネとは、身体が卑しい愛を求めて止まない  
 人を墮落させる愛のこと。  
 高きミンネは心が高き品位を求め飛翔するよう人を鼓舞するのです。  
 この愛が今、一緒に来るようわたしに手招きします。  
 なぜ節度が躊躇うのか不思議です。  
 心からの愛が来れば、心が動いてしまいます。

Mechthild におけるミンネも、肉体的、感覚的愛と精神的、靈的愛の対立、併存の中にある。ここでは肉体、感覚は *gebruchunge* (神のミンネの至福なる享受) を得るための重要な基体とみなされている<sup>29)</sup>。Mechthild では、三位一体の神は魂と、イエスは身体と、聖霊は五感と結びつく<sup>30)</sup>。しかし彼女のミンネも最終的には両者の *Synthese* としての「心からの愛」へと止揚する。年老いた Mechthild は神に祈る。

Jhesus, vil lieber buole min, la mich in warer ruwe  
 und in *herzelicher liebi* zuo dir  
 und la mich niemer erkuolen,  
 also das ich diner *herzeklicher minne* in minem herzen  
 und in miner sele und in minen funf sinnen  
 und in allen minen geliden ane underlas enpfinde. VII. 38, 10 ff.

わたしの愛するお方イエス様、罪に対する真心からの悔悟と  
 心からの愛であなたのもとへ向かえるようお認め下さい。  
 そしてわたしの心、わたしの魂、わたしの五感、  
 わたしの全身にあなたの心からの愛（ミンネ）をたえず感じていられるように、  
 わたしを冷やさないで下さい。

4. Mechthild が彼女のウニオ ミスティカを現世における人間の魂と神との生きた相互関係と捉え、神との個人的会話においてパトスの愛を具象的に描写するため、これに適応する宮廷ドイツ語の形象を用いたことは、彼女の意図したところと思われる<sup>31)</sup>。彼女自身ドイツ中世宮廷詩人の言語芸術やその精神に触れ、これを利用できる環境にあった<sup>32)</sup>。Mechthild の神とのミンネは肉体的、感覚的であり、同時に精神的、靈的である。この二つのミンネの対立、葛藤はミンネザングを中心とする宮廷文学のテーマでもある。さらに、神とのミンネに関する個人的体験を情緒的に表現する手段として Mechthild が見出した *visio* と *gustus* を中心とする五感に関する記述は、感覚的かつ現実的表現形式として極めて有効である。この *visio* と *gustus* に関する語彙は、しかし、エートス的、精神的な意味への転換によって、極めて靈的、抽象的な概念を獲得する。*visio* と *gustus* に関して、Mechthild では実に多様な語彙が使用されるが、この精神的、靈的概念は特定の語彙、すなわち *beschowen* とその名詞形 *beschowunge*、および *gebruchen* とその名詞形 *gebruchunge* のみに含まれる。特に

gebruchen, gebruchunge は神のミンネを対象に、彼女のウニオ ミスティカの中心概念であり、これはさらに unterscheide (弁別), bekanntnisse (認識), そしてこれらによる abebreuchunge (節度) を伴うことで思想内容的に頂点に達する。

Mechthild の本質的な神秘主義の教義は、しかし、彼女の書における象徴の中に潜み隠れている<sup>33)</sup>。ドイツ中世宮廷文学において、詩人の個々の語彙に詩人独自の思想、理念が潜んでいる<sup>34)</sup>のと同様、Mechthild のドイツ語の一つ一つが独自の概念を内包し、全体として彼女の法悦 (Ekstase) の思想を醸し出すのである。

## 註

- 1) 須澤 通：「Mechthild のドイツ語と宮廷詩人語」信州大学人文学部，人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞第38号，2004年，11～21頁および須澤 通：「Mechthild のドイツ語—神秘主義的語彙の発展—」信州大学人文学部，人文科学論集＜文化コミュニケーション学科編＞第40号，2006年，45～58頁参照。
- 2) Hans Neumann: Mechthild von Magdeburg »Das fließende Licht der Gottheit« Bd. I.: Text. München1990.
- 3) Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit I, 2, 9 f..
- 4) 須澤 通 (2004年)：14頁～16頁参照。
- 5) Gottfried von Straßburg: Tristan, nach dem Text v. Friedrich Ranke, neu hrsg. ins Nhd. übers. mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort v. Rüdiger Krohn, 3. durchges. Aufl. Stuttgart 1984.
- 6) 須澤 通 (2004年)：17頁～19頁。
- 7) Moser/Wellmann/Wolf: Geschichte der deutschen Sprache, Bd. 1. Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. Von Norbert Richard Wolf, Heidelberg 1981, S. 186.
- 8) ヴェンツラッフ＝エッケベルト『ドイツ神秘主義』(横山 滋訳) 国文社1979年，60頁参照。
- 9) ヴェンツラッフ＝エッケベルト66頁参照。
- 10) Hugo Moser/Helmut Tervooren (eds.): Des Minnesangs Frühling, I. Text, Stuttgart 1998.
- 11) 「ミンネザング」(高津春久編訳)，郁文堂1978年。
- 12) 西谷啓治：「マグデブルクのメヒティルド」，『西谷啓治著作集』第7巻，創文社1991年，127頁参照。
- 13) Mechthild の「身体性」への志向については，「神性の流れる光」(香田芳樹訳)，『ドイツ神秘主義』1. 創文社1999年の訳注 (307頁～308頁) および解説 (360頁～362頁) 参照。
- 14) 「神性の流れる光」(香田芳樹訳) 308頁参照。
- 15) 金子直一：「見るものと見られるもののあいだ —マイスター・エックハルトの場合—」金沢大学法文学部論集 (文学編) 第20巻，1972年，12頁参照。
- 16) 金子直一：15頁参照。
- 17) 金子直一：18頁参照。
- 18) Niklaus Largier (ed.): Meister Eckhart. Werke I: Predigten, Frankfurt a. M. 1993.
- 19) 「神性の流れる光」(香田芳樹訳) 308頁参照。
- 20) 「神性の流れる光」(香田芳樹訳) 308頁参照。
- 21) Margot Schmidt: Elemente der Schau bei Mechthild von Magdeburg und Mechthild von Hackeborn. Zur Bedeutung der geistlichen Sinne, in: Peter Dinzelbacher/Dieter R. Bauer (eds.), Frauenmystik im Mittelalter, Ostfildern 1985, S. 134, 141 f.

- 22) Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers, nach dem 1912 vom Deutschen Evangelischen Kirchenausschuß genehmigten Text
- 23) Niklaus Largier (ed.): Meister Eckhart. Werke II: Traktate, lateinische Werke, Frankfurt a. M. 1993.
- 24) Kurt Ruh: Geschichte der abendländischen Mystik, Bd. II: Frauenmystik und Franziskanische Mystik der Frühzeit, München 1993, S. 270; Marianne Heimbach: „Der ungelehrte Mund“ als Autorität. Mystische Erfahrung als Quelle kirchlich – prophetischer Rede im Werk Mechthilds von Magdeburg, Stuttgart – Bad Cannstatt 1989, S.35. 「神性の流れる光」(小竹澄栄訳), 『中世思想原典集成』15. (上智大学中世思想研究所編) 平凡社2002年の訳注406頁参照。
- 25) Margot Schmidt, S. 140.
- 26) トリスタンと神秘主義の関係, 類似性については「トリスタンとイゾルデ」(石川敬三訳), 郁文堂1976年の解説378頁～383頁参照。
- 27) Unterscheidungsvermögen (識別能力) としての discretio については Margot Schmidt (1985) S. 133 ff. を参照。
- 28) Die Lieder Walthers von der Vogelweide. Unter Beifügung erhaltener und erschlossener Melodien neu hrsg. v. Friedrich Maurer, 1 Bändchen: Die religiösen u. die politischen Lieder, 3., durchgesehene Aufl., Tübingen 1967
- 29) 「神性の流れる光」(香田芳樹訳) 362頁参照。
- 30) Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit VII, 65, 25 f..
- 31) Hildegund Keul: Mechthild von Magdeburg, Poetin – Begine – Mystikerin, Freiburg 2007, S. 131 ff.
- 32) Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserlexikon, Bd.6, Berlin/New York 1987, S. 260.; Hildegund Keul, S.21 ff.
- 33) ヴェンツラッフ＝エッケベルト65頁参照。
- 34) 須澤 通: 「ドイツ宮廷文学におけるいわゆる集団特殊語彙について」信州大学人文学部, 人文学論集<文化コミュニケーション学科編>第33号, 1999年, 79～99頁参照

[Mechthild の和訳は, 香田芳樹及び「神性の流れる光」(植田兼義訳), 『キリスト教神秘主義著作集』第4巻I. 教文館1996年の他, Margot Schmidt (Übersetzung, Einführung, Kommentar): Mechthild Magdeburg, Das fließende Licht der Gottheit, Stuttgart-Bad Cannstatt 1995と Gisela Vollmann-Profe (Hg.): Mechthild Magdeburg, Das fließende Licht der Gottheit, Frankfurt am Main 2003を参考にした]

\* この論文は, 須澤のテーマ設定に基き, 主として浜(信州大学人文学部研究科修了。現在信州大学全学教育機構非常勤講師)が資料・用例の収集と分析・考察を, 須澤が資料・用例の分析と考察および論文の文章化(執筆)を担当した共同作業による成果である。

(2007年11月20日受理)